

【最優秀賞】

【大地と街を潤す豊川用水】

豊川市立南部中学校 三年 河邊 心那

新型コロナウイルスの状況も落ち着き、私たちの学校でも授業や学級生活が再開しました。六月三日からは給食も始まり、地元の食材を生かした献立を楽しんでいます。私たちの住む豊川市やその周辺では、特に、シソやウズラの卵が有名で、東三河地方が全国シェアの半分以上を占めているそうです。最近ではバラやスプレーマムなど、多岐にわたって全国トップレベルの生産をあげています。

そこで私は、昨年の夏休みに豊川用水について調べたり、頭首工を見に行ったりしたことを思い出しました。八十キロメートルに満たない豊川流域では、毎年のように洪水や干ばつに襲われ、五十万人以上の農民が苦しんでいたそうです。松原用水という細い用水路が一五六七年に造られたことから、どんなに長い間、人々が水に悩まされてきたかがわかります。明治時代になって、牟呂用水や神野新田という三河湾沿いの干拓地ができますが、水の安定供給によって人々の生活も安定したのは、豊川用水の完成があつてのことです。

豊川用水の完成によって、豊川が流れていない、愛知県の先端田原市までが、豊かな農地になりました。昔の田原市では、地下水やため池を使用した農業に、限界がありました。水不足にも強いサツマイモや小麦しか育たなかったそうです。今では、メロンやキク、養豚などで日本の農業をリードし、市町村別農業産出額は四年連続で全国一位に輝いています。一年間で使用される二億六千万立方メートルのうち、七十パーセントは農業用水に、二十四パーセントが水道用水に使われているとわかりました。私が特に驚いたことは、新城市大野の頭首工から渥美半島先端の初立池まで八十二キロ。豊川本流よりも用水の方が長いということです。さらに、電力を使用せず、自然の力だけで流れていると聞いて、びっくりしました。渥美半島は起伏があるのに、どんな工夫があるのか不思議に思いました。

もう一つ強く感じたことは、ダムのおかげです。決して長くはない豊川には二つのダムがあります。古くからある宇連ダムは、一九八十年代に一度干上がった、ダム底に沈んだ村が現れたと聞いたことがあります。豊川流域や豊川用水が水不足で困らないように、二〇〇一年には大島ダムが完成しました。それでもまさかの事態に備え、天竜川の佐久間ダムから通水もできる仕組みがあるそうです。私たちが生きていくうえで、水はなくてはならないものです。水に困っていた東三河の農業が大きく変わり、私たちの町に水が安定してやってくるのは、上流に住む人々のダム建設への理解と協力があつてこそです。故郷や住んでいた集落がダム底に沈んでしまった人たちがいることを、決して忘れてはいけません。水の供給や農作物生産がこれからも持続可能であるために、私も植林活動や河川の清掃に積極的に参加したいです。

豊かな田園風景やスプリングラーが勢いよく回る野菜畑。日本屈指の農業王国になった東三河。私たちの大地を潤すのは、豊川用水を流れる豊富な水のおかげだと、改めて感じました。豊川市という名の通り、自然に流れる川はもちろん、そこに生きる人々の苦勞や努力や知恵に支えられてできた用水やダムがあつて、水が流れ続けていることがわかりました。

豊川用水通水五十周年を迎えた今、あたりまえに手元に届く水のありがたさをかみしめ、この土地に生まれてきたことに感謝したいです。半年後には進学先を決定し、卒業の準備に向かいます。地元の食材を生かした給食をいただけるのも、わずかな期間となります。新しい土地、新しい世界に旅立つ期待と不安はありますが、きっと故郷の大地が支えてくれると思います。しっかりとこの土地に根を張って生きます。水が大地に染みわたっていくように。